

令和4年度「教職課程担当教員養成プログラム」活動報告

宮本 勇一（広島大学）

1. はじめに

広島大学大学院教育学研究科教育学習科学専攻（教育人間科学専攻（博士課程後期）は、平成19年9月から平成22年3月にかけて、「Ed.D型大学院プログラムの開発と実践～教職課程担当教員の組織的養成～」(平成19年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム)に取り組んだ。同プログラムでは、①確かな研究力に加え、大学教育において実践的な指導力を発揮できる人材、②高等教育を含む教育臨床に的確に対応できる人材、の育成が目指された。同プログラムは、将来、教職課程を担当する大学教員、すなわち「先生の先生」を組織的に養成しようとするものであり、これまで研究者養成に特化してきた大学院教育の在り方を見直すものでもあった。

以上の目的を引き継いで、同プログラムは平成22年度から「教職課程担当教員養成プログラム」(以下、教職P)として実施されている。本章では、本年度の活動を、正規教育課程に関する部分を中心に述べていく。

1. 大学授業構成論講究・大学教員養成講座

令和2年4月の大学院改組に伴って教職Pのカリキュラムも変更され、大学授業構成論講究と大学教員養成講座の履修が教職Pの履修要件となった。前期の大学授業構成論講究では、教員養成の歴史・制度を学ぶとともに、「教職科目」のシラバス分析などを行う。後期の大学教員養成講座では、授業方法に加えて、大学教員の制度上の身分や大学におけるダイバーシティなどを学び、大学教員として就労するための基本的な事項を学ぶこととなる。大学教員養成講座（基礎）は、広島大学の三階層制TA制度の三段階目に当たるティーチング・フェロー（TF）の要件となっていることから、人間社会科学研究科以外の受講生も多い。教職Pの活動を通しては、これまで教育学講座の中の交流が主であったが、この講座を通して他研究科の院生と交流の機会が増えていくこととなった。

2. 教職授業プラクティカム

「教職授業プラクティカム」は、履修生がTAとして講義・演習等に入りながら、最終的に1回のコマを担当する「教壇実習」をメインとした科目である。教育の補助者から仕手へと立場を変える中で、慣れない“責任ある”教育実践者としての立ち回りを要求される。プログラム履修2年次において広島大学開講科目で前後期にそれぞれ1回、3年次には他大学で1回の計3回教壇に立つ。

加えて、事前に授業検討会を設けて、1時間程度はその指導計画案について吟味する（事前検討会）。検討会には授業提供教員とTA指導教員（一般的にメンター教員あるいはファシリテーターと解される存在）、他のプログラム履修院生が参加し、授業の目的や資料の適切性、時間配分、なぜその教育方法を採るのか、などが話し合われる。履修生は教壇実習当日までに、検討会で指摘された事項をもとに、指導案を修正することになる。下表は本年度に実施した教壇実習の一覧であるから、参照されたい。

教壇実習を終えた履修生は、事前検討会と同様のメンバーとテーブルを囲み、実施後の授業検討会を

行なう（事後検討会）。自身の実習についての振り返りを行ない、次の実習に活かす。

表 プラクティカム日程一覧

	No.	実習実施日	実習生	授業名	題材・内容
前期	1	5月18日	A	保育原理 (広島県内の大学)	保育の思想
	2	5月23日	B	教育の思想と原理	経済と教育(西洋編)
	3	5月26日	C	教育行政学Ⅰ・Ⅱ	教育課程行政および教科書行政の現状と課題
	4	6月2日	D	教職概論 (広島文化学園大学)	子どもの学び・遊び・成長と教師(保育者)
	5	7月4日	E	教育原理 (福山平成大学)	文化的営みとしての教育
	6	7月6日	F	教育社会学演習Ⅰ・Ⅱ	ライフストーリーの教育問題へのアプローチ
	7	7月11日	G	教職入門	説明責任時代の教師～校務分掌および組織マネジメント～
	8	7月14日	H	学校教育課程論A (香川大学)	教育課程・カリキュラムをめぐる問題「カリキュラムへの批判的アプローチ」
後期	9	11月8日	F	教育社会学Ⅰ	教育問題の社会学1
	10	11月11日	B	西洋教育史Ⅰ・Ⅱ	教育は貧困・差別・排除とどのように闘ってきたか：埋め込まれた差別構造と変革への希求
	11	11月21日	C	教育と社会・制度	児童・生徒管理の現状と課題
	12	2月1日	G	教育経営学Ⅰ	生涯学習社会の観点からみる学校

3. 教職教育ポートフォリオ

3年間の取り組みは、授業理念の形成によって締めくくられる。授業理念そのものは履修のどの年次からでも抱いておき、各々で磨いていくべきだが、それをまとめた文章にする機会として「教職教育ポートフォリオ」の作成が課せられている。

ポートフォリオの授業では担当教員の指導の下、授業理念（あるいはティーチング・フィロソフィー、教授哲学と表記する者もいる）を推敲し、完成させていく。また、理念を記すにあたってエビデンスとなる成果物を、ポートフォリオに整理して蓄積する。同ポートフォリオは、履修生のこれまでの学びの履歴を示す書類（learning portfolio）であるとともに、自分自身がこれまでの実習や研究を経てどのような大学教育・教師教育を展開できるかを示す書類（teaching portfolio）でもある。教職課程担当教員養成としてどうありたいか、そのためにどういったことを意識するべきか、自分の学んできたことはどう生かせるのか、これらが主要な記述内容となっている。